
ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

猪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン〜葉の救助隊〜

【Nコード】

N8794Y

【作者名】

猪

【あらすじ】

突然人間からキモリになって、記憶も失ってしまったヨウと、心優しいが臆病なワニノコのベウ。ある時ふとしたことから出会ったこの2人は、救助隊を結成し、力を合わせてさまざまな困難に立ち向かっていく。そのさなか解き明かされていくヨウがポケモンになった理由、さらにベウの秘密とは？

プロローグ（前書き）

はじめまして、作者の猪いのししです。このたびは、小説「ポケモン不思議のダンジョン〜葉の救助隊〜」を読んでくださりありがとうございます。少々長くなと思いますが、どうか最後までお付き合いください。

ブローグ

……ここは、どこだ……？

……そよ風が……気持ちいい……。

……どこかの草原に……寝そべってるようだ……。

……空気が……うまい……。

……なんてうまい空気なんだ……。

……それにしても気持ちいい……。

……このままずっと寝そべっていたい……。

「……え、ねえってば！」

……誰かが……呼びかけている……？

「ねえってば、起きてよ！ねえ！」

……うるさい。俺は寝ていたいのに……。

「ねえって！もしかして、死んでるの？」

……死んでたら返事もできないだろうが……。

……仕方ねえな、そろそろ、起きるか……。

プロローグ（後書き）

今回のお話は、主人公である葉の視点でしたが、次回からは、第三者視点でお送りします。

キモリとワニノコ（前書き）

第2話です。今回は2人の出会いと自己紹介が主なので物語の進展はほとんどありません。

ベウ「こんなペースで本当に大丈夫なの？」

まあ、はつきり言ってみなきゃ分からんwあと、もうすぐ期末テストだから勉強で更新遅くなるかも。

ベウ「今日から連載始めたのに、早くもそんな宣言しちゃうの!？」

ヨウ「ってか、試験勉強しろよ。」

……2人して痛い所突かないで。

キモリとワニノコ

ここは、ポケモンの世界。この世界に人間はおらず、ポケモンのみが平和に暮らしている。そんな世界のある場所に、ポケモン広場とよばれる所があった。広場といっても、そこには多くのポケモンが住み、小さな村のようになっていた所だった。

「はあ……。」

ポケモン広場からそう遠くないところにある、名もなき小さな森のなかを、1人のポケモンがため息をつきながら歩いていた。そのポケモンは、小さなからだの割に発達した大きなあご、背中には赤いトゲ、短めで太い尻尾を持った、水色のポケモン、ワニノコである。

「どうしてオレは、こんなに臆病なんだろう…。」

そのワニノコが自分に愚痴った。

「結局今日も、ペリッパ―連絡所の前でためらって引き返しちゃったよ…。」

ワニノコは、歩きながらさらに愚痴り続け

る。

やがて、目に涙をにじませながら言った。

「きつとオレなんか……この先ずっと臆病な
まま……一生……。」

ついに泣き出そうとしたその時、ふと、倒れ
ているポケモンがワニノコの目に止まった。

「あっ!!」

ワニノコは目ににじませていた涙を 拭
い、倒れているポケモンに駆け寄った。

「ねえ、キミ、大丈夫？」

そのポケモンから返事は返ってこない。

「ねえ、ねえってば!」

やはり返事はない。

「ねえってば、起きてよ! ねえ!」

ワニノコはしだいに焦る。

「ねえって! もしかして、死んでるの?」

“死んでいる”その言葉を自分で言っておき
ながら、ワニノコは震え出した。

（ま、まさか…本当に…）

ワニノコの恐怖がピークに達しようとした、その時だった。

「う…ん…」

そのポケモンが、小さくうめきながら立ち上がった。

「ああっ！良かったあ～～！！」

ワニノコが思わず安堵のため息をもらす。

「誰も死んじやいな……………っ！？」

そのポケモンは、ワニノコと目が合った途端に、あんぐりと口を開け、ひどく驚いた表情をした。

ワニノコはきょとんとしながら聞いた。

「どうしたの？そんなに驚いて」

ポケモンはさらに驚きながら言った。

「ワニノコが……………しゃべった……………！？」

「え？」

ワニノコもさらにきょとした。

「オレがしゃべるのが…そんなに…変？」

その言葉を聞いて、ポケモンは考えこみだした。
ワニノコは今度は眉をひそめながら言った。

「キミ、ちょっと変わってるね。ポケモンの世界なんだから、オレがしゃべっててもおかしくないだろ？」

「ポケモンの……世界……？」

そうつぶやいたあと、ポケモンは一瞬考えると、ワニノコに言った。

「だったら変わってるのはお前の方じゃないのか？」

「え？」

ポケモンの発言に、ワニノコはまたきょとした。

ポケモンはさらに続けた。

「ここはポケモンの世界なんだろ？じゃあ何でお前は人間を前にして驚かねえんだ？」

「えっ！？人間！？」

その言葉を聞いた途端、ワニノコがすっとんきょうな声を上げた。

「人間　なんて、どこにいるの？」

「俺が見えねえのか？」

ワニノコの問いに、ポケモンがげんそうに答える。

「何言ってるの？キミ、どう見てもキモリ

じゃん。」

「!？」

ワニノコにキモリと呼ばれたポケモンはこの上なく驚いた表情をしたあと、身体中を見渡した。

（黄緑色の身体に腹が赤い……！それにこの濃い緑色の尻尾……！！）

見渡しながら身体の特徴を心の中で言っ、そして愕然とした。

「俺……キモリに……」

そう言いかけて口をつぐんだ。

（俺、何でキモリなんか……あれ？）

キモリは必死に記憶をたどろうとするが、何も思い出せない。

（ど、どうゆうことだ！？もしかして、記憶喪失ってやつか！？な、何故！？）

考えれば考えるほど混乱していくキモリを見て、ワニノコはポカーンとしていた。

（本当に……変わっているのかも……。）

そう思いながら、ワニノコはとりあえずという感じで切り出した。

「そう言えばまだ名前を聞いてなかったね。オレはベウ。キミは？」

ベウと名乗ったワニノコは、険しい顔で考え続けるキモリに問いかけた。キモリはベウを少し見たあと、また考えだした。

（俺の……名前……）

少しの間、沈黙の時間が流れた。

「どうしたの？なんで答えないの？」

ベウが訪ねた。だが、キモリは答えない。

「……………」

とうとうじれなくなったベウが、キモリを急かし始めた。

「もう、なんで何も言わないの？せめてうんとかすんとか言っ……」

その時だった。

「ヨウ。」

突然キモリは答えた。しかしいきなりだったためか、ベウは「え？」と聞き返した。キモリは繰り返す。

「ヨウ。木陰 「カゲヨウ」 葉だ。」

ヨウと名乗ったキモリはまた考えだした。

キモリとワニノコ（後書き）

ベウ「名前もつたいぶりすぎだろ……」（汗）「

それは多分今回の話の一番の反省点。（汗）
自分でも書きながらまずいかもって思ってた。

ヨウ「まずいのは作者のテスト勉強じゃなくてか？（笑）」

……この場でテストの話禁止令……（泣）

洞窟探検（前書き）

はい、久しぶりの投稿です。ようやく第3話が完成しました。

ベウ「第1話、第2話が一日で投稿されたのに対して、この差は一体？（汗）」

読めば分かると思いますが、今回の話は前回と比べてかなり長いです。でも実際は逆に、前回と前々回が短かったです。あと、ちよくちよく前回と前々回のミスを手直ししていたというのもあります。機会があれば読んでみてください。

ヨウ「さらっと大事なことを言っただけか？（汗）」

洞窟探検

また訪れた沈黙の時間……………

自分がポケモンになった理由を無言で考え続けるヨウに、それを静かに見守るベウ。

（本当に何もしゃべらないな…。）

そう思い、ベウはヨウに問いかけようとした。

「ねえ、キミつてもしかして……………」

そう言いかけたところで、ヨウが何かを感じとったように急に顔を上げ、そして地面を見た。ベウは一瞬げんな顔をしたが、その動作の理由はすぐに分かった。大きな地震が起きたのだ。

「わわわわっ！地震だー！！」

涙目で慌てるベウに対して、ヨウは警戒した表情で黙ってバランスをとっていた。しばらくすると地震はおさまった。

「……………ふう、おさまったみたいだね。」

ベウはホッとしながら言った。
その時だった。

「怖いよ～～、誰か助けてえ～～」

「えっ!?!」

かすかだが、確実にどこからするそのような声をベウは聞き逃さなかった。

その声はさらに

「え～～ん、え～～ん、助けてえ～～」

と言った。

ベウは辺りを見渡し、声がした方向を確認するとその方向を指差しながら言った。

「ヨウ! 今、この方向から……ってあれ!?!」

ベウはヨウに伝えようと横を向くが、彼も先ほどの声を聞いていたらしく、ベウの横にいたはずのヨウは、既に声がした方向に走り出していた。

「あっ! 待ってよ～～～～!!」

一足遅れて、ベウも走り出した。

ヨウはしばらく走ったところで、地面が裂けてできたと思われる穴を発見した。穴の底は暗くて見えない。そして先ほどの声は、この穴からであると分かった。

「助けてえ〜！誰か助けてえ〜！」

（……………ここか。）

ヨウは穴からする声を聞き、心の中でつぶやいた。

「……………はあ、……………はあ」

息を切らしながら、ベウも追いついた。

するとヨウは、近くにあった石ころを拾い、穴に投げ込んだ。
すぐに石ころが穴の底についた音がした。

（飛び降りれない高さじゃない…。）

ヨウはまた心の中でつぶやくと、飛び降りようとわずかにかがんだ。
そこでベウが、ヨウに注意した。

「危ないよヨウ。少し離れないと穴に落ちちゃうよ。」

するとヨウは、そのままの姿勢で、

「声はこの穴からだ。」

とだけ言うと、暗くて底が見えない穴に顔色ひとつ変えずに飛び降りた。

「あっ！！」

ベウは慌てて穴を覗き込んだ。

「ヨウ!」

しかし、ヨウの姿は既に見えなくなっていた。ベウはさらによく見ようと、穴の縁に手をついて身を乗り出した。すると手を滑らせてしまい、穴の中に真つ逆さまに落ちていった。

「えっ!?!わあああああああ………」

ベウの悲鳴が穴にこだました。

先に穴に飛び降りたヨウは、見事に着地すると、警戒しながら辺りを見渡した。そして自分の正面に洞窟を確認した。

(……………よかった…見えないほどの暗さじゃないな。)

そう思いながら、洞窟に進もうと足を一步踏み出した。その時だった。

「……………あああああああああ!」

突如頭上から聞こえてきた謎の悲鳴に、ヨウが上を向くと、そこには――

恐怖で目と口をいっぱいに開き、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになったベウの顔があった。

「!?!」

突然のホラーフェイスにぎよつとしたヨウは、その場で硬直してしまい、落ちてくるベウを頭で受け止める形となってしまった。

「うぐっ！」

「痛あつー！」

ヨウとベウは同時に声をあげ、それぞれ頭を押さえて痛がった。頭を押さえながらも、ベウはヨウを見つけると、泣きながら彼に飛びついた。

「うああああ！！怖かったよおおおお！！！」

「……………（怖かったのは俺の方だ…。）」

自分にしっかりと抱き付き、涙と鼻水で自分の肩を濡らすベウに少し引きながら、ヨウはそう思った。

ベウを少々乱暴に引き離すと、ヨウは問いかけた。

「何で……………降りてきた……………？」

その問いに、ベウは首を横に振ってから答えた。

「違うよ。穴を覗きこんだ拍子に落ちちゃったんだよ。本当は飛び降りる気なんてなかったのに…。」

そう言ったあと、ベウは辺りを見渡し、そして震え出した。

「………暗い……………」

「お前、怖いのか？」

明らかにおびえた様子のベウを見ながらヨウは言った。

「う、うん。」

ベウはおびえながらも少し恥ずかしそうに答えた。

「ならお前はそこで待ってる。」

それだけ言つと、ヨウは洞窟に向かって歩き出した。

「えっ？あつ……ちょっと待ってよ！オレ、一人でいるほうが怖いよ〜〜〜！！」

そう叫びながら、ベウも洞窟に入ってしまった。

「暗いなあ、怖いなあ」

洞窟に入ってまだ間もないが、ベウは震える体をヨウにぴったりと寄せ、この言葉を一定時間ごとに呪文のように言い続けている。

「……………くつつきすぎだ。」

ベウの微振動に耐えかねたヨウが一目見てつぶやいた。

「ごめん……だって怖いんだもん。」

ベウは謝りながらしぶしぶ離れたが、腕は離さなかった。

(……………無理矢理でも待たせておくべきだったかな……………。)

そう思いながらふと目を戻すと、洞窟の壁にもたれかかる一匹のポケモンが目に入った。

そのポケモンは、赤い複眼を持っており、身体の色は紫色、そして背中に大きな白い羽根がある、モンシロチョウのようなポケモン、バタフリーだ。

「はぁ……………はぁ……………」

よく見るとバタフリーは傷だらけで、疲れきったように肩で息をしていた。

「あつ!!ちよっと、大丈夫!？」

少し遅れてバタフリーに気付いたベウが、駆け寄った。

「あ……………あなたたちは……………!？」

バタフリーが息を切らしながら問いかけた。

「オレはベウ。で、こっちがヨウ。それよりその傷大丈夫?」

ベウが心配そうにバタフリーの身体を見渡す。

「わ、私は平気です。それより、私の子供が…キャタピーちゃんが……………」

そう言つて洞窟の奥に目を向ける。奥からは、先ほどの誰かがすすり泣くような声が聞こえる。
バタフリーはさらに続けた。

「突然地面が裂けて、キャタピーちゃんがその穴に落ちてしまったのです。私も助けようと穴の中に降りたのですが、ポケモン達に襲われて……このとおりです。」

バタフリーは悔しそうに言つとうつむいた。

「ポケモンたちが……襲ってくる!?!」

ベウが信じられない、という様子で言った。
しかしヨウは、

「この奥だな?」

とだけ言つと洞窟の奥に向かって歩き出した。

「えっ!?!ちよつと、聞いてたのヨウ!?!
ポケモンたちが襲ってくるって……」

「怖いなら待つてろ。」

ベウの言葉を途中で切り、一旦立ち止まって振り返りながらヨウが言った。

その挑発的な言葉にむつとしたベウは、

「それはやだ。」

と不機嫌気味に言った。

「ならばとつと行くぞ。」

前を向くと、再びヨウは歩き出した。
ベウも付いていこうと歩き始めたが。

「お待ちください。」

背後からした声に気付き、ベウが振り向く。
ベウに声をかけたのは、先ほどのバタフリーだった。
さらにバタフリーは

「これを持っていってください。」

と言い、小さな青い木の実を差し出した。
ベウはバタフリーのもとへ行き、木の実を受け取ると、言った。

「これは…オレンの実……。」

「いざというときに役に立つはずです。それより……。」

バタフリーは真剣な眼差しでベウを見つめると、

「子供を…お願いします。」

と言った。恐らく先ほどの会話から察したのだろう。
その言葉にベウは少々頼りなくうなずきながら、

「う、うん。頑張るよ。」

と言い、オレンの実を右手に握りしめ、見えなくなりつつあるヨウを急いで追いかけた。

ヨウとベウは、バタフリーと出会った場所からさらに奥に進んだ所にいた。

洞窟は少しばかり迷路のようになっていたが、絶えず泣き声が聞こえるため、迷うことはなかった。

ベウは相変わらずヨウの腕を左手でしっかり掴み、恐怖で震えていた。

そんなベウに呆れて、ヨウが文句を言おうと目を向けたその時、

「あつ！あそこー！！」

ベウが正面を指差しながら叫んだ。ヨウもその方向を向くと――少し広い空間の真ん中で、すすり泣く一人のポケモンがいた。黄緑色で細長い身体に、尻を向いているためよく見えないが、恐らく額のあたりから出ている赤い二又に分かれた触角が確認できる。

「ねえ、キミ！」

「えっ？」

ベウが話しかけると、そのポケモンは振り向いた。黒くて丸い、涙が浮かぶ大きな目と視線が合った。

（間違いないな。こいつがキャタピーだ。）

そう思い、ヨウはベウの左手を離させると、
一歩前に出て、言った。

「お前を助けに来た。」

そして、キャタピーに近づこうと足を進めると、

「あ、危ないよー!!」

突然キャタピーが叫んだ。

（なに!?!）

その叫び声に気付いたヨウは、とっさに後方に飛び退いた。
その直後、ヨウが立っていた地面に何かが激突し、土煙が上がった。

「な、何!?! 一体何が起こったの!?!」

その光景を見ていたベウが、慌ててヨウに駆け寄った。

「ちつ、外したか……………」

土煙の中から悪意のこもった声がした。

「だ、誰!?! 早く出てきてよ!! 何で突然襲うの!?!」

その言葉に答えるかのようにポケモンが姿を現した。
見た目が卵そっくりというより、卵に目をつけただけという感じの

ポケモンが、合計6人いる。

「オレ達はタマタマ兄弟だ!!」

リーダーと思いきタマタマが声を張り上げて答えた。

さらに今度は別のタマタマが言った。

「何で襲うかって？最近地震や自然災害が多くてムシャクシャするから、ここに来る奴らをボコボコにして、ストレス発散してるのさ。」

「そ、そんなことのために…?」

ベウはその答えに驚きを隠せない様子だ。

ヨウは黙ってタマタマを見ている。

「それにしても、惜しかったですね兄貴。」

先ほどの二人とはまた別のタマタマが言った。

「そうだな。あのキャタピーが余計なことを言わなければ……」

また別のタマタマがそう言うと、六つの視線が一斉にキャタピーの方に向いた。

「ひっ!!」

キャタピーが恐怖で震える。

リーダーと思いきさっきのタマタマが、にらみを利かせながら言った。

「おい、ガキのくせに小賢しいことしてんじゃねえぞ。痛い目に遭いてえのか？」

さらに今度は先ほどリーダーの次に話したタマタマが同じくにらみを利かせて言った。

「子供だからって許してもらえと思うなよ？」

タマタマ達はキャタピーににじり寄っていく。キャタピーはただただ震えることしか出来なかった。それを見ていたベウは直感的に、

（た、大変だ！止めなきゃ！！）

と思ったが、身体の方は震えて言うことをきかない。タマタマはさらにキャタピーに近づいていく。その時、

「つくづくおめでたい奴らだな。」

冷たい声でそう言ったのは、ヨウだった。

タマタマ達もその声に気付き、振り向いた。

ヨウはさらに続けた。

「ストレスがたまってこんな所でこんな小さなガキをいじめてよ……しかもそれを堂々と言いはなつてよ……」

ここでヨウは、哀れむような表情から突然険しい表情となって、言った。

「救いようのない、とんだゲス野郎どもだな。」

「ヨ、ヨウ？」

ヨウのあまりに険しい表情ととんでもない暴言に、ベウは恐れを感じた。

しかし、タマタマ達の方かというと――

「……は？てめえ、もっかい言ってみろ……」

タマタマのリーダーが怒りで声を震わせながら言った。他のタマタマ達も全員、顔を真っ赤にして爆発寸前といったところだ。しかしヨウは、今度は馬鹿にするような笑みを浮かべながら、

「聞き取れなかったのか？お前らにお似合いの言葉を探してやったのに。」

と言った。

これで怒りが頂点に達したタマタマのリーダーは怒鳴った。

「てめえ殺されてえようだな！！おい、やるぞてめえら！！」

他のタマタマ達も怒りが爆発したらしく、奇声に近い声をあげながらヨウとベウに襲いかかった。

洞窟探検（後書き）

ベウ「今回はヨウがよくしゃべったね。」

でも暴言とか皮肉とかしか言っただろ？こんなふうにヨウが長くしゃべる時は半分くらいがろくなことじゃないから、そのつもりで（笑）

ヨウ「……………しばくぞ、作者……………（怒）」

初めて見せた勇気（前書き）

今回は初めての戦闘シーンです。上手く書けたかどうか分かりませんが、全力は尽くしました。

ヨウ「ま、作者の全力はこの程度のもんなん
だなと思ってくれ（笑）」

ベウ「あまりの低クオリティに絶句しないよ
うにね（笑）」

ヨウはともかく、ベウ……！お前言い過ぎだろ……！そんなこと言ったら、終いにはすねるぞ……！！

ヨウ「（こいつ自分ですねるとか言ってる……キモッw）」

初めて見せた勇気

「くらえ！ “たまなげ” ！！」

そう叫びながらタマタマ達が突っ込んできた。

（……………よし、かわせる。）

そう思いながらヨウは身構えた。

一方ベウは、ものすごい殺気を発しながら目の前に迫るタマタマ達を見て、腰が抜けてしまっていた。

「あ……………うわ……………」

避ける直前で、ヨウはベウの震えるか細い声に気付いた。

「ボサツとするな！！」

そう叫びながら、ヨウはベウに蹴りをいれ、その衝撃で横に転ばし、そのあと自分もベウとは反対側に飛び退いた。

「うわっ！！」

突然ヨウに蹴られて驚きと痛みで声を上げるベウ。その直後、彼らが立っていた所にタマタマ達が激突した。

タマタマ達はすぐに起き上がると、ヨウに向かってまた飛び出してきた。

「くそっ、 “はたく” ！！」

ヨウは平手打ちでタマタマの一人を弾いた。
だが、すぐに次のタマタマが飛び出す。

「またか… “はたく” ！！」

それも弾いた。

しかし、タマタマ達は数の多さを利用して、ヨウに次々と攻撃を仕掛けた。

「 “はたく” ！ “はたく” ！！ “はたく” ！！！！」

ヨウは落ち着いてタマタマ達を弾いていた。

「ヨウ！！」

その様子に気付いたベウが叫んだ。

するとヨウは、攻撃を弾きながら言った。

「俺の心配より、早くキャタピーを！！」

はつとしたベウは、急いでキャタピーのもとに行き、

「もう大丈夫だよ。」

と言いながらキャタピーを抱え上げ、逃げる準備をした。
その頃ヨウは、

「はぁ、はぁ、 “はたく” ！！」

多少息を切らしながらも、弾丸のように飛び出してくるタマタマ達と互角に戦いながら、反撃のスキをうかがっていた。
その時ヨウは、あることに気付いた。

（ん？タマタマの数が…一人足りない！？）

先ほどまで六人いたはずのタマタマが、今は五人しかいなかったのだ。

それに気付いた途端、ヨウの後頭部に衝撃と激痛が走った。

（！！、しまった！！）

そう、タマタマの一人がこっそりヨウの背後に回っていたのだ。

タマタマの攻撃を受け、前にのめったヨウのあごに、また別のタマタマの攻撃が直撃した。

「がっ…！！」

痛みで声を上げながら、ヨウはあお向けに倒れた。そんなヨウに、タマタマ達の一斉攻撃が降り注いだ。

ある者の攻撃は左足首に、またある者の攻撃は左肩に命中し、さらにある者の攻撃は腹に直撃した。

「がああ…っ！！」

ヨウは悲鳴を上げたが、今度は攻撃がのどに命中し、中断された。

「どうだ！！オレ達のチームプレーは！！」

何がチームプレーだ、と思ったが言えなかった。

既に意識が朦朧とし、ヨウの視界はかすれ始めていた。

（……もう……ダメかな……。）

その時、ベウの声が聞こえた。

「早く逃げ……ヨウ……！」

タマタマ達の一斉攻撃を受け、ボロボロになったヨウを見て、ベウは愕然とした。

その声に気付いたヨウは思った。

（そうだ……せめてあいつらだけでも……！）

ヨウは、攻撃を受け続けながらも力を振り絞り、わずかに上体を起こすとベウに目を合わせ、言った。

「お前ら……だけでも……逃げろ……！俺は……平気……だ……！」

途切れ途切れにそれだけ言うと、またあお向けになった。

「そ……そんな……ヨウ……！」

ベウは迷っていた。

（助けなきゃ……でも、やっぱり怖い……）

激しい葛藤。助けたいという思いに反して震えて動かない足。キヤタピーはベウの腕の中で怯えている。

その時だった。ベウは突然激しい頭痛に襲われた。

「うつ……!!」

キャタピーを地面に落とし、両手で頭を押さえてうずくまった。

「うつっ…うつ…あああゝゝゝ!!」

痛みで奇声を上げるベウを、キャタピーは震えながら見ていた。
その時、

『お前…だけでも…逃げろ!!…私は…大丈夫…だ!!』

ベウの脳内に誰かの声が響いた。

(い……今の声は……!!)

ベウはその声に聞き覚えがあった。そして次の瞬間戦慄が走り、頭痛が消えると同時に彼の答えは決まった。

「……そろそろ止めを刺すか。」

タマタマのリーダーが言った。

「はあ……はあ……」

ヨウは既に身体中がアザだらけで、左足首は膨れ上がり、のどに攻撃された時に傷がついたためか、口の端から一筋の血が垂れていた。

「そうだな。かなりいたぶったしな。」

リーダーとは別のタマタマが言った。

「みんな、それでいいか？」

また別のタマタマが聞くと、タマタマ達は皆うなずいた。
またリーダーが叫んだ。

「よし、じゃあ殺るぞ。みんな、準備しろ。」

タマタマ達は一斉に身構える。

(……本当に……もうダメだ……)

ヨウは心の中で覚悟を決めた。

「オレ達をコケにするとどうなるか思い知らせてやる。殺れっ!!」

リーダーの号令とともにタマタマ達は一斉に飛びかかった。

ヨウがきつく目を閉じる。

その時だった。

「やめろ!!」

そう言ったのは、ベウだった。しかし、その声からは恐怖や恐れは
みじんも感じられなかった。

一斉に振り向いたタマタマ達に近づきながらベウは続けた。

「それ以上ヨウに……………」

ここで一旦言葉を切ったベウは、大きく息を吸い込み、そして最大まで吸い込むと一気に吐き出すように言った。

「手を出すなあ————！！！」

それと同時にすごい勢いで水を吐き出し、タマタマ達を吹き飛ばした。

技“水鉄砲”だ。

「ぎゃあ~~~~~！！！」

タマタマ達が驚きと衝撃で悲鳴を上げた。

あとに残ったヨウは、ベウの勇ましい姿を見て目を丸くしていた。

「お、お前……………」

「ヨウ！！大丈夫！？」

ヨウの言葉を途中で切り、ベウが駆け寄ろうとしたら、

「この野郎~~~~~！！！」

起き上がったタマタマのリーダーが怒鳴った。

他のタマタマ達も起き上がると、そのうちの一人が言った。

「臆病なくせに、調子こいてんじゃねえぞ！！！」

さらに別のタマタマが言った。

「お前もボコってやる！！覚悟しろ！！」

その言葉と同時に、タマタマ達は今度はベウに飛びかかるうと向かってきた。

「ヨウ！これを！！」

そんなタマタマ達を見ても臆することなく、ベウはヨウに向かって握っていたオレンの実を投げた。オレンの実はヨウのすぐそばに落ちた。

そのオレンの実をヨウが手を伸ばして取るのを見届けてから、ベウは言った。

「それはオレンの実。それを食べれば……うわっ！！」

ベウの言葉は最後まで続かなかった。言い終わる前に、タマタマ達に攻撃され、しりもちを付いてしまったのだ。

「うわああ……！！やめてええ……！！」

先ほどの勇ましい姿はどこへやら。

ベウはその場に縮こまると、両手で頭を覆い、身を守り出した。

そこへ、タマタマ達は一斉に攻め立てた。

それを見たあと、手に取ったオレンの実を見ながらヨウは心の中で言った。

（とりあえず、これを食べればいいんだな。）

ヨウはオレンの実を口に放り込み、噛んで飲み込んだ。

すると、身体中の痛みが和らいでいき、それと同時に元気が出てきた。

（スゲー、なんだこの感覚は！？）

立ち上がるまでに回復したヨウは、タマタマ達に攻撃されるベウを見た。

「痛い！痛いよ！！やめてええ！！！！！！」

「黙れ！生意気な臆病野郎が！！」

痛みと恐怖で泣きじゃくるベウを、タマタマ達は容赦なく攻め立てる。

その時、ベウの耳に、

「上出来だ、ベウ。」

というヨウの声が届いた。

その声にベウが頭を上げると、

「ぎゃあっ！！」

突然目の前にいたタマタマが吹き飛んだ。

そのタマタマは、地面に激突すると、失神して動かなくなった。

「！？だ、誰だ！？」

目の前でのびたタマタマをあっけにとられて見つめるベウの上で、リーダーが叫んだ。

タマタマ達はベウへの攻撃を中断して、辺りを見渡す。
するとまた、

「ぐはっ!!」

今度はベウの左手側にいたタマタマが吹き飛んだ。
リーダーとは別のタマタマが前に出て言った。

「くそっ!どこに居やがるんだ!!」

「ここだ。」

謎の襲撃者は答えると、そのタマタマの背後に現れ、思いきり殴りつけた。

「がはっ!!」

断末魔と同時にタマタマは吹き飛んだ。
ベウは一瞬見えた襲撃者の姿に、思わず叫んだ。

「ヨウ!!」

「“電光石火”か!!」

タマタマのリーダーが悪態をつく。
次にリーダーは襲撃者の攻撃に備えて身構えると、叫んだ。

「来てみやがれ!!この卑怯野郎が!!」

「卑怯者はお前らだろ?それに……」

ヨウの呆れたような声が響くと、背後に気配を感じたタマタマのリーダーは振り向いた。

その様子を見て、ベウも振り向く。

二人のタマタマの間に、ヨウが立っていた。次の瞬間、二人のタマタマは倒れた。

「お前が身構えても、後ろの二人がこれじゃなあ……………」

ヨウはニヤリとして、タマタマのリーダーににじりよりながら続けた。

「まだやるか、リーダーさん？」

「うつ……………」

リーダーは一步下がりがらうめいた。迷っているようだ。

すると、リーダーが背中から降りたことにより、立ち上げられるようになったベウが、ヨウの隣に立って言った。

「オレも…戦うよ。六対二なら楽勝だろうけど、一対二はさすがに厳しいんじゃないの？」

最もなその言葉を聞いて、リーダーの答えは決まったようだ。

「くそお！！逃げるぞ！！お前ら！！」

そう言ってリーダーは、一目散に逃げていった。

「あつ！！兄貴いゝゝ！！待ってえゝゝ！！」

他のタマタマ達も、少し遅れてリーダーのあとを追い、間もなくなかった。

「……いい気味だ。」

ヨウが言った。その口調は、出会ったばかりの時のように物静かなものだった。

ベウが答えるように言った。

「うん。オレ達、勝ったんだよね？」

「ああ……。」「

そう言うと、辺りを見渡した。

そして眉をひそめながらヨウが聞いた。

「キャタピーは？」「

「あつ！！」

ベウは青ざめた。戦いに気をとられ、すっかり忘れていたのだ。

「し、しまった……おい、キャタピーくん！！」

ベウが見渡しながらかんだ。
すると、

「は……はい……」

岩の陰からキャタピーが恐る恐る出てきた。
ベウは慌てて駆け寄り、

「ごめんね!!今度こそ本当にもう大丈夫だよ!!」

と言いながら、再びキャタピーを抱え上げた。
その様子を見るとヨウが、

「行くぞ。」

と言い、来た道を引き返すべく歩き出した。

「うん!!」

ベウも強くうなずき、ヨウのあとに続いた。

初めて見せた勇氣（後書き）

いろいろ危ないところでしたが、なんとか切り抜けました。

ヨウ「タマタマのリーダーの呼び方の統一性 のなさに吹いた
ww」

いちいち「タマタマのリーダー」って書くとかどいと思ったもんで
……（汗）

ベウ「じゃあ別のポケモンにすればよかった のに。」

うーん、あそこで出てくるポケモンの中ではタマタマが強かったから。

ベウ「弱い方がよかったよ……。」

ヨウ「ああ。俺も思う。」

確かにその方が君達は楽だろうね。でもそれじゃ面白くないから。
だから君達二人には小説を面白くするためにこれからもたくさん苦
労してもらっよ」

ヨウ・ベウ「ええ~~~~~!?。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8794y/>

ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

2011年12月3日20時00分発行